○○①⓪

1 August 1974

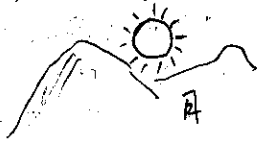
pm 5:00 C1 5215 m　　尿 250, 150, 100
息こらえ 52 sec.　　200 150 150
pulse 84 呼吸 24 体温 35°8分　150
便 5回

今日は井上西内山口の3名 4日連続行動の後で休養日とし、明日C2のデポ回収のみ一回行なう。

C2からは田中、八田がC3へのice fallのルート工作に出る。第2の垂壁のチムニー上のスノーブリッジ等にfixを張ってもらう。これでC3へのボッカができる。

C1のDoctor酒井も来、酒井は雪目もやったとか。田中、八田のコンビで例のice チムニーの登り下りの話しに花を咲かせる。明日からはC3への荷上げに当り、明後日2名C3入りし、Sherpiの東峰の南稜にルートをのばす。all fixで約6500~6800程度のコルへC4を出し、西峰のコルがC5、となり西峰へ至るわけであろう。C3からはいよいよリッジクライムとなる。

夕ぐれのサルトロカンリがピンクに染まる一瞬実にすばらしい光景になる。



次に満月がP35, 36間にかかりこれ又すばらしいさかな。

夜半にげりのため何度もポンへ行くのだが月明りですばらしい夜景をたのしむ事ができる。

○○○○

2 August 1974

田中、八田、山口、西内C3へ荷上げ、小性決にてげり直し
B.Cからは河本、Captain C1入り、C1からはDoctor酒井
C2へボッカ

C2からC3へのルートはice fallの落口あたりの氷の動きが活発でスノーブリッジの崩壊やクレバスのopenがあり危険この上ないのでfix等も慎重にやらねばならない。C3以上の装備食料のボッカがC2まで十分でないのとC2 C3間のice fallの通過がいくらか危険であるとのバラサーブの判断から連日ちょうちょう荷上げする事を避けて一気にC3建設を目指す事とした。よって3日はC1からの補給とハイポーター3名のC2入りを待って、4日C2の5名とハイポーター3名でC3建設する事と決定

小性決をしている所へ10:30ハイポーター3名C2へボッカに来る。昼すぎ酒井Doctorが C2へやってきた。氷河のDoctorに心電図を取ってもらう。酒井も同様に島津の心電計を入れてexaminationの写真をとる。

久しぶりにテントキーパーをやり、B.C C1からあげてもらったmuttonを使ってマトンカレーを作る。食料デポをあさると、ビーフン、すしの子等出てきたのでこれも使ってわかめとビーフンの酢のもの等作ってみる。それにホーレン草のおしたしをつけてC3荷上げ隊の帰りを待った。もちろんC1からの2人にも紅茶とミルクのサービスをした。

○①①②

3 August 1974

今日は、C_2全員休養，C_1から Doctor 河本、酒井、が荷上げにやってくる。C_2の全員日焼けで出発前のおもかげもとぼしい。今日は、ハイポーター3名をC_2入りさせて明日のC_3入りにそなえた。

AM1:00 ポン（げり）月明りが美しい 250 cc
AM7:00 〃 〃 300 cc
PM2:00 〃 〃（尿量 520cc）ポン小量

とうとうクロマイを飲む。大阪医大の薬にもめげず、タンナルビンにもまけず何とお前は強いげりか。

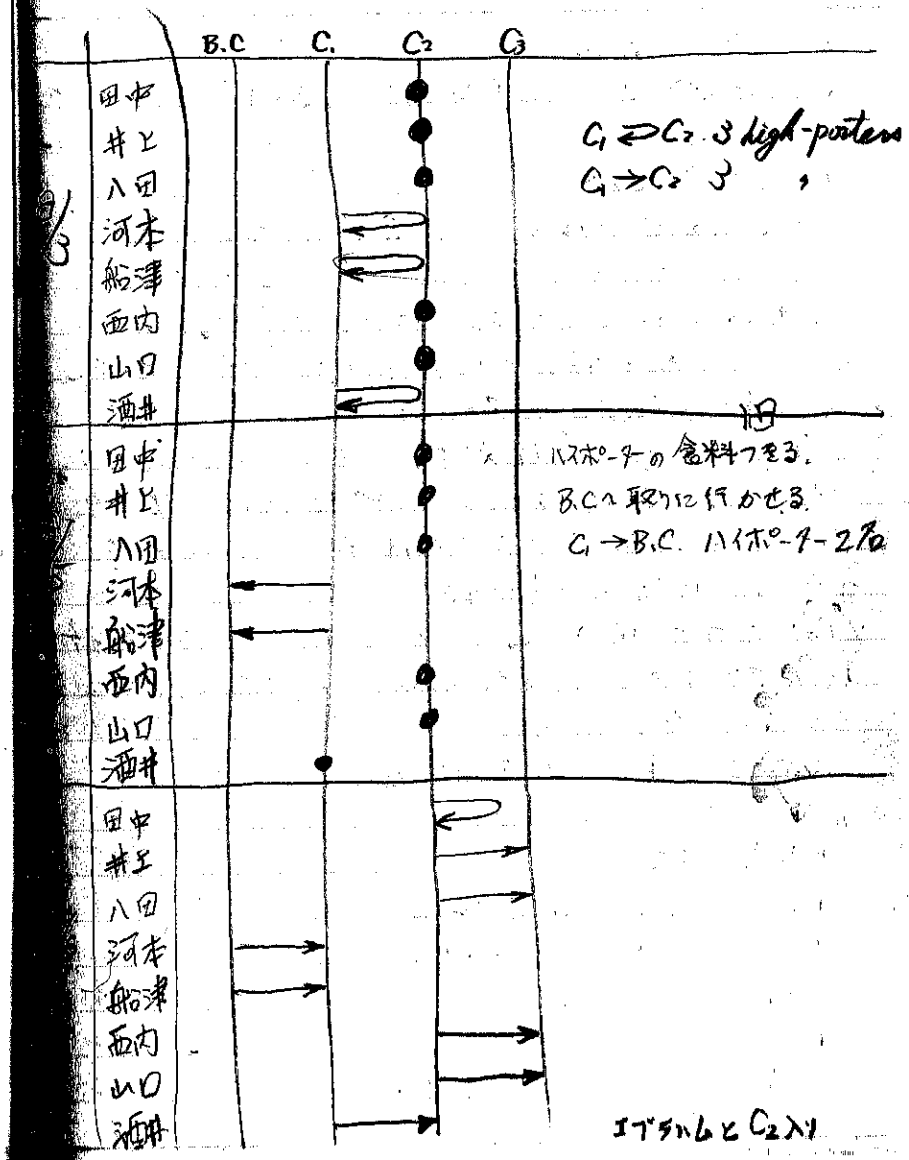
今日はC_2へサーブ全員が集合。昼食Partyをテント口外でやる。サラミにマヨネーズ、コンビーフにマヨネーズ，ママゼリー ヨーカン，クラッカー，ビスケット等。Doctor はテストを続ける。心電図 河本 西内 山口，田中 八田と取る。C_2 5250m を P3 点として クリノメーター測量を行なう。スケッチブック（田中隊長のもの）にスケッチ360°を写き方位と迎角を記入する。実際にスケッチMapを作る場合には、写真がよく役にたつだろう。

手紙を書く、中西先生、西村先生、阿部先生、建さん、田中泰雄 など。

明日はいよいよC_3 今日中にげりが止る事を祈りつつ夕食は、たっぷり食べる事とするか？

ハイポーター6名 $C_1 \rightarrow C_2$ ボッカ。ママチョ，ママトセン アサッド C_2留り。

朝食の雑炊はなかなかあっさりしていてうまかった。



4. August 1974

am 8:00　5270 m

いざC3入りの朝に悪天に見舞われてしまい出鼻をくじかれた感じである。

pm 6:00　5280 m

全員決. Captainとエブラハム. C1で河本Doctor. 酒井とちょっとしたもめ事を起し C2へ直線にやってきた。言いたい事を言わせてやる. なだめて. 隊員としてのあつかいをしてやると約束すると. きげんを直してC1へ帰って行った。隊長命令のC1 Stayを無視した事については. 僕は今日は. Liaison Officerとしてやってきたのだといきまいていた。

小生4日目の決げりが完治. クロマイのおかげであろう。

C2には. 6人用OBテントとヤラスカ3人用テントの2張. ヤラスカは. ハイポーター使用.

C3は希望のコルへ. C4はSherpi東峰南稜上へ設け東峰アタックする. 西峰については余力を考えてAttackするかどうか決定したい.

C2…田中. 井上. 八田 西内. 山口.

"手紙を出すべき人"

1. 田中薫 先生
2. 円満字さん
3. 森田さん
4. 金井さん
5. 丹浪さん
6. 大田さん
7. 福本さん
8. 山内さん
9. 夏原さん
10. 小林京美
11. 坂西さん
12. 徳田さん

5 August 1974

am 6:00　5300 m　気圧最低きで落ち込む

10:00　5290 m　少し回復へ向う

朝目がさめると. テントをたたく雪の音. 西内君と2曲ほど悪声をあげて. 再びねむる事にする. 八田氏 8:00の交信. ハイポーターの食料が切れるので必ず荷上げする様指示する.

昨夜のなっとう少し変質しかけたものを八田氏食べてなっとうからふな寿司など思い出し. 和歌山のなれ寿司. 富山のます寿司など. 又吉野のニシンそば等日本の食べもののはなし.

9:30ごろはらもへって全員起きて朝食の用意.

明日からは. いよいよ頂上攻撃のC3 C4建設に当れそうである. 頂上attack後の我々の仕事としては. サルトロの方向へC3からコルへ達する事と. シェルピ西峰とジャンダルムー峰のコル. Sherpa西氷河を見わたせる5000 mのコルのコルへは. 隊員を送って写真. スケッチ. ちょっとした測量Dataを持る. よう考えておく.

ジャンダルムのコルは. 約5700 m程度でシェルピ西稜と. カベリ氷河側へ氷河がどう落ちているかを. 知る事ができる.

この悪天のあと. 5日～6日間の晴天が約束されているのでいよいよ勝負時であると考えられる.

またまた本日荷上げの件とエブラハムの亀下の件. Doctorのtreatmentの件等Captainが不満をたらたらトランシーバーで昨日の事を再度言うという. 彼も子供である.

12:00　5285 m.

小生思うに、子供を相手に頭にかりかり来てけんかしている河本さんも大人気ない。今日は、ハイポーターの食料も切れるというドジな話しである。サーブだけでは、7000m峰は登れないはず。後方守備としてはなっていない。小生もその点については頭に来て、トランシーバーでガミガミ河本さんを言ってしまう。

けっきょく、Doctor河本さんがB.Cへ下り、2名のハイポーターとともにB.Cからata ダル等を明朝ボッカし、もし明日悪天であればC2から3名のハイポーターを食料取りに下らせる事とした。晴天であれば、C2入りし、東峰attackの1chanceを得る事となる。C3へは、井上、八田、西内、山口の4名が入り交代でC4へのルート工作とC4建設、東峰attackにかけるわけである。C2には田中隊長、酒井が入りC3へのice fallルートの確保とハイポーターを使っての荷上げに当るものとする。C3からC4へは3日以内にルートが開かれる必要がある。計4日でC4を6500m近くに設営すれば、attackは、次期晴天中にtryできるので実にlast chanceを8月20日までに再attackのchanceを得るかもしれない。

天気サイクルからすると、5日、15日、25日が8月の悪天極値をとるものと思われる。

pm 2:00　5300m

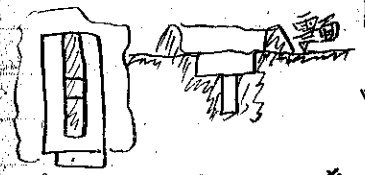
今日は遠征隊員の今日までの活動内容と意識について、クレームをつけた。組織としての活動の中に個人としてはどう位置づけ、又遠征を通じて隊から何を得又、この期間中に何をして帰るのか。毎日をまんぜんとすごして、早く、日数がたたないかと、それだけを考えている様では隊員としての資格は無い。ひげを伸しにカラコルムへ来てもらってはこまる。そんな隊員は隊長としても副隊長としても、隊を送り出してくれた神大、及び神大山岳会、多くの企業に申し訳がたたない。

今日で悪天周期も終るであろう。明日からは、頂上への前進を試る。全力投球である。

昼から、ちょっと変質しかけた、はなっとうを使ってぜんざいを作った所、何とも上質のものができうまい。ついでにコロッケ等も、サラダ油でコンビーフ、マッシュポテトを使用して西内、山口が作ってくれる。マヨネーズをつけてたべる。テンプラ等も作っている。天気の方は相変らず悪い。

pm 5:15　pressure 5310m

休みすぎては体調も悪くなると思い、快適なポン場作りに夕食前の一時間ほどをすごす。雲が切れ青空が見える様になったが、気圧がさらに下る。ポン場はアラスカの時と同様の振り込み式。テントの前にも50cm角のこみ穴をほる。

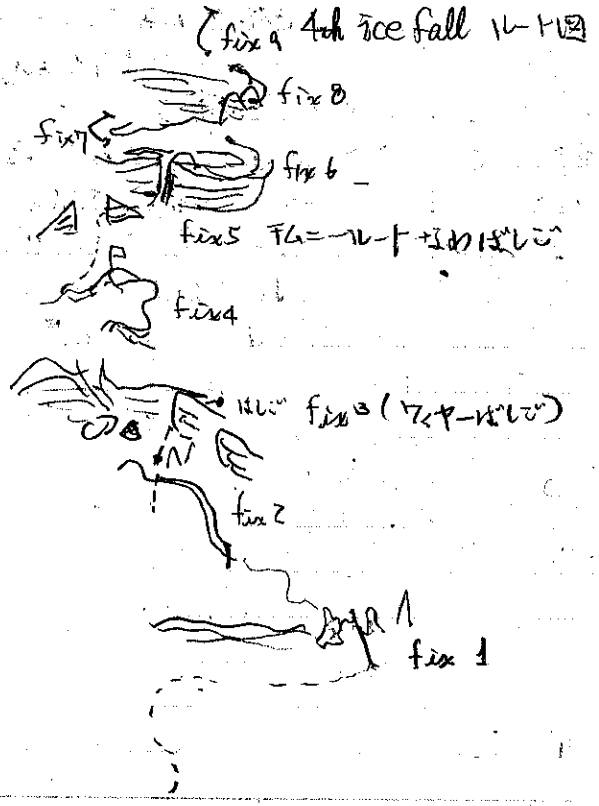


テント生活が長くなるとこうした処置は必ず必要である。

ハイポーター達には4米、紅茶、砂糖、等、サーブの食料を与える事としたが、C1の連中もむりからぬ所は出るが酒井については登山経験も多い現役である

点を考えると全く何を考えてC1にいるのかと疑問に思ってくる。

八田兄は毎日人が変った様によく食べている。この分で行くと、C3でも頑張ってくれると思う。たのみの綱は、山口、西内うまく引張ってゆけるかどうか。the most important week の始りである。



6 August 1974

am 7:00 5320m C2
pm 6:20 5770m C3

C3は5800m以上へおきたいと考えていたが何せ地形まかせである。そうも言ってはおれない。今日は8:00をすぎてから出発したため、2日間の新雪で、トレースが消され、一気にC3へ荷物をあげる事はできなかった。

山口は、はしご以外は個装のみにしてラッセルと、フィックスザイル おこしに使う。八田、西内 かなりの重荷でC3へ入る pm5:00 C3に6人用テント張る。

井上、山口 8mm ザイルにて、アンザイレン、西内、八田、田中 ハイポーター 3名 icefall帯上部までボッカ。

キャプテンとのもめ事も一応解決。酒井は、エブラUGとハイポーターの食料を持ってC2入り。

C3建設隊の方は、山口、井上が先行し、昨日のデポを回収して希望のコルの近くへ C3を張る。6人用のテントを使用 グランドシートの下にカートンボックス2個をつぶして敷く。断熱マットとなって快適である。

BCからは2名のハイポーターと河本、船津がハイポーターの食料等持ってC1入りする。

C3へのルートは、icefallの落口あたりのクレバスが悪いが、あとは大雪原を行く。

○①①②

3 August 1974

今日は、C_2全員休養，C_1から Doctor 河本、酒井、が荷上げにやってくる。C_2の全員日焼けで出発前のおもかげもとぼしい。今日は、ハイポーター3名をC_2入りさせて明日のC_3入りにそなえた。

AM1:00 ポン（げり）月明りが美しい 250 cc
AM7:00 〃 〃 300 cc
PM2:00 〃 〃（尿量 520cc）ポン小量

とうとうクロマイを飲む。大阪医大の薬にもめげず、タンナルビンにもまけず何とお前は強いげりか。

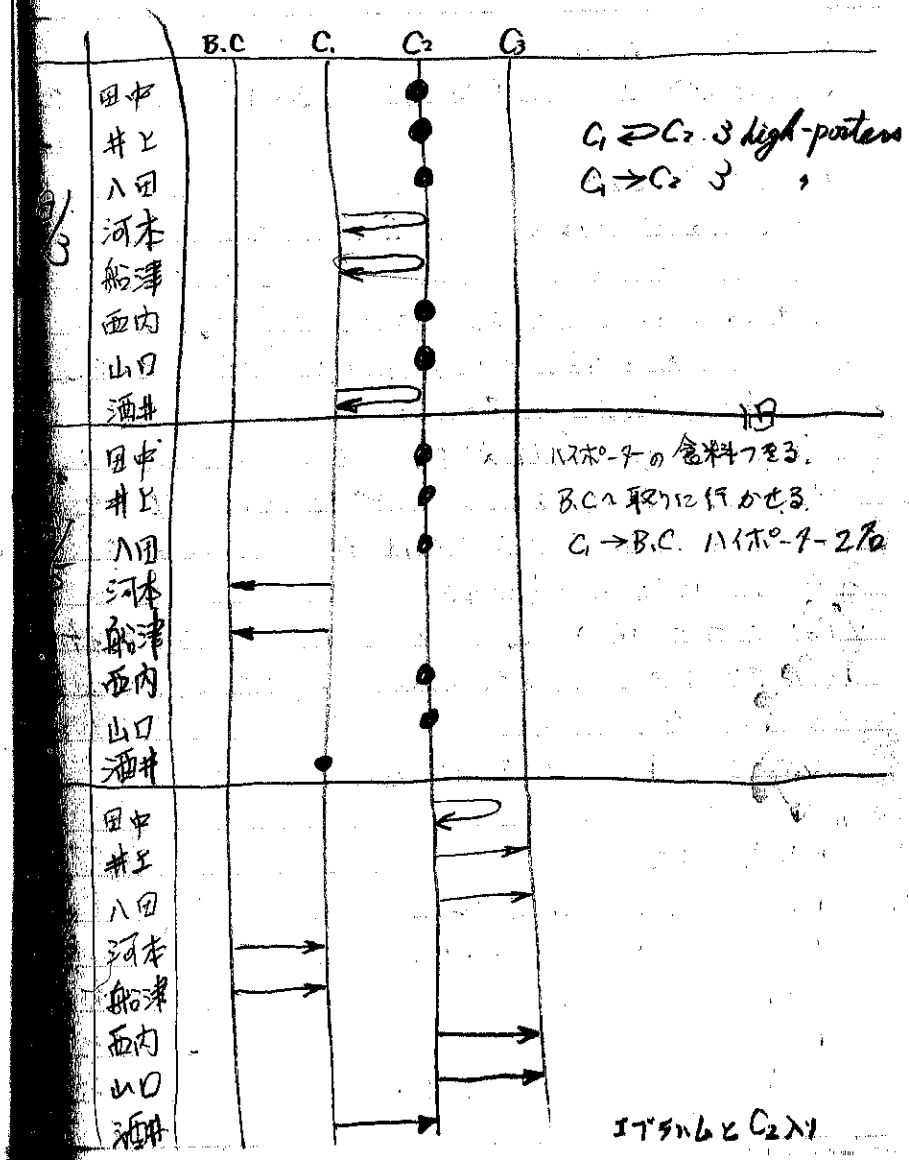
今日はC_2へサーブ全員が集合。昼食Partyをテント口外でやる。サラミにマヨネーズ、コンビーフにマヨネーズ，ママゼリー ヨーカン，クラッカー，ビスケット等。Doctor はテストを続ける。心電図 河本 西内 山口，田中 八田と取る。C_2 5250m を P3 点として クリノメーター測量を行なう。スケッチブック（田中隊長のもの）にスケッチ360°を写き方位と迎角を記入する。実際にスケッチMapを作る場合には、写真がよく役にたつだろう。

手紙を書く、中西先生、西村先生、阿部先生、建さん、田中泰雄 など。

明日はいよいよC_3 今日中にげりが止る事を祈りつつ夕食は、たっぷり食べる事とするか？

ハイポーター6名 $C_1 \rightarrow C_2$ ボッカ。ママチョ，ママトセン アサッド C_2留り。

朝食の雑炊はなかなかあっさりしていてうまかった。



4. August 1974

am 8:00　5270 m

いざC3入りの朝に悪天に見舞われてしまい出鼻をくじかれた感じである。

pm 6:00　5280 m

全員決. Captainとエブラハム. C1で河本Doctor. 酒井とちょっとしたもめ事を起し C2へ直線にやってきた。言いたい事を言わせてやる. なだめて. 隊員としてのあつかいをしてやると約束すると. きげんを直してC1へ帰って行った。隊長命令のC1 Stayを無視した事については. 僕は今日は. Liaison Officerとしてやってきたのだといきまいていた。

小生4日目の決げりが完治. クロマイのおかげであろう。

C2には. 6人用OBテントとヤラスカ3人用テントの2張. ヤラスカは. ハイポーター使用.

C3は希望のコルへ. C4はSherpi東峰南稜上へ設け東峰アタックする. 西峰については余力を考えてAttackするかどうか決定したい.

C2…田中. 井上. 八田 西内. 山口.

"手紙を出すべき人"

1. 田中薫 先生
2. 円満字さん
3. 森田さん
4. 金井さん
5. 丹浪さん
6. 大田さん
7. 福本さん
8. 山内さん
9. 夏原さん
10. 小林京美
11. 坂西さん
12. 徳田さん

5 August 1974

am 6:00　5300 m　気圧最低きで落ち込む

10:00　5290 m　少し回復へ向う

朝目がさめると. テントをたたく雪の音. 西内君と2曲ほど悪声をあげて. 再びねむる事にする. 八田氏 8:00の交信. ハイポーターの食料が切れるので必ず荷上げする様指示する.

昨夜のなっとう少し変質しかけたものを八田氏食べてなっとうからふな寿司など思い出し. 和歌山のなれ寿司. 富山のます寿司など. 又吉野のニシンそば等日本の食べもののはなし.

9:30ごろはらもへって全員起きて朝食の用意.

明日からは. いよいよ頂上攻撃のC3 C4建設に当れそうである. 頂上attack後の我々の仕事としては. サルトロの方向へC3からコルへ達する事と. シェルピ西峰とジャンダルムー峰のコル. Sherpa西氷河を見わたせる5000 mのコルのコルへは. 隊員を送って写真. スケッチ. ちょっとした測量Dataを持る. よう考えておく.

ジャンダルムのコルは. 約5700 m程度でシェルピ西稜と. カベリ氷河側へ氷河がどう落ちているかを. 知る事ができる.

この悪天のあと. 5日～6日間の晴天が約束されているのでいよいよ勝負時であると考えられる.

またまた本日荷上げの件とエブラハムの亀下の件. Doctorのtreatmentの件等Captainが不満をたらたらトランシーバーで昨日の事を再度言うという. 彼も子供である.

12:00　5285 m.

小生思うに、子供を相手に頭にかりかり来てけんかしている河本さんも大人気ない。今日は、ハイポーターの食料も切れるというドジな話しである。サーブだけでは、7000m峰は登れないはず。後方守備としてはなっていない。小生もその点については頭に来て、トランシーバーでガミガミ河本さんを言ってしまう。

けっきょく、Doctor河本さんがB.Cへ下り、2名のハイポーターとともにB.Cからata ダル等を明朝ボッカし、もし明日悪天であればC2から3名のハイポーターを食料取りに下らせる事とした。晴天であれば、C2入りし、東峰attackの1chanceを得る事となる。C3へは、井上、八田、西内、山口の4名が入り交代でC4へのルート工作とC4建設、東峰attackにかけるわけである。C2には田中隊長、酒井が入りC3へのice fallルートの確保とハイポーターを使っての荷上げに当るものとする。C3からC4へは3日以内にルートが開かれる必要がある。計4日でC4を6500m近くに設営すれば、attackは、次期晴天中にtryできるので実にlast chanceを8月20日までに再attackのchanceを得るかもしれない。

天気サイクルからすると、5日、15日、25日が8月の悪天極値をとるものと思われる。

pm 2:00　5300m

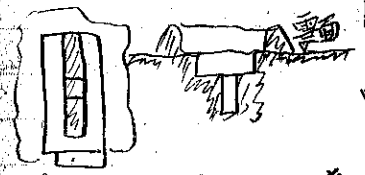
今日は遠征隊員の今日までの活動内容と意識について、クレームをつけた。組織としての活動の中に個人としてはどう位置づけ、又遠征を通じて隊から何を得又、この期間中に何をして帰るのか。毎日をまんぜんとすごして、早く、日数がたたないかと、それだけを考えている様では隊員としての資格は無い。ひげを伸しにカラコルムへ来てもらってはこまる。そんな隊員は隊長としても副隊長としても、隊を送り出してくれた神大、及び神大山岳会、多くの企業に申し訳がたたない。

今日で悪天周期も終るであろう。明日からは、頂上への前進を試る。全力投球である。

昼から、ちょっと変質しかけた、はなっとうを使ってぜんざいを作った所、何とも上質のものができうまい。ついでにコロッケ等も、サラダ油でコンビーフ、マッシュポテトを使用して西内、山口が作ってくれる。マヨネーズをつけてたべる。テンプラ等も作っている。天気の方は相変らず悪い。

pm 5:15　pressure 5310m

休みすぎては体調も悪くなると思い、快適なポン場作りに夕食前の一時間ほどをすごす。雲が切れ青空が見える様になったが、気圧がさらに下る。ポン場はアラスカの時と同様の振り込み式。テントの前にも50cm角のこみ穴をほる。

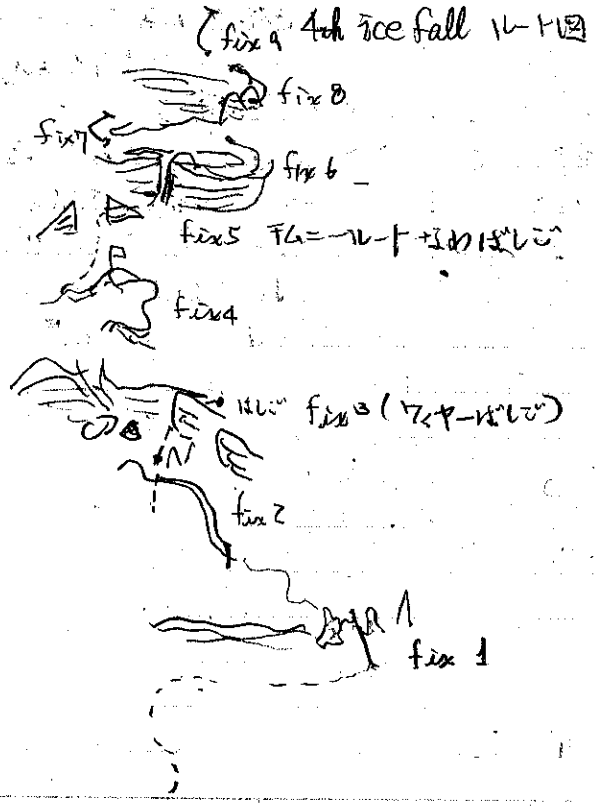


テント生活が長くなるとこうした処置は必ず必要である。

ハイポーター達には4米、紅茶、砂糖、等、サーブの食料を与える事としたが、C1の連中もむりからぬ所は出るが酒井については登山経験も多い現役である

点を考えると全く何を考えてC1にいるのかと疑問に思ってくる。

八田兄は毎日人が変った様によく食べている。この分で行くと、C3でも頑張ってくれると思う。たのみの綱は、山口、西内うまく引張ってゆけるかどうか。the most important week の始りである。



6 August 1974

am 7:00 5320m C2
pm 6:20 5770m C3

C3は5800m以上へおきたいと考えていたが何せ地形まかせである。そうも言ってはおれない。今日は8:00をすぎてから出発したため、2日間の新雪で、トレースが消され、一気にC3へ荷物をあげる事はできなかった。

山口は、はしご以外は個装のみにしてラッセルと、フィックスザイル おこしに使う。八田、西内 かなりの重荷でC3へ入る pm5:00 C3に6人用テント張る。

井上、山口 8mm ザイルにて、アンザイレン、西内、八田、田中 ハイポーター 3名 icefall帯上部までボッカ。

キャプテンとのもめ事も一応解決。酒井は、エブラUGとハイポーターの食料を持ってC2入り。

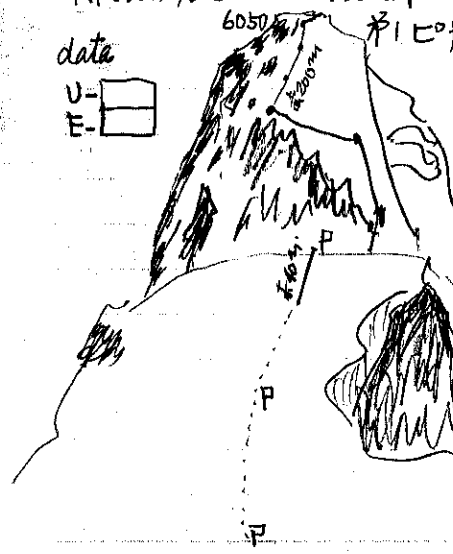
C3建設隊の方は、山口、井上が先行し、昨日のデポを回収して希望のコルの近くへ C3を張る。6人用のテントを使用 グランドシートの下にカートンボックス2個をつぶして敷く。断熱マットとなって快適である。

BCからは2名のハイポーターと河本、船津がハイポーターの食料等持ってC1入りする。

C3へのルートは、icefallの落口あたりのクレバスが悪いが、あとは大雪原を行く。

7 August 1974

am 7:00 C3 高度 5800m (Camp 3)
8:00 〃 5790m (Camp 3)
本日の行動予定は、半日行動とし、井上、山口で東峰南稜の偵察、八田、西内で食料等デポ回収とする。
pm 3:00 5770m (Camp 3)
am 9:50 C3 出発 (party 井上, 山口)
11:00 南稜第一台地、昼食 ウェファースのうまさ
13:30 高度計 6050m 地点
14:00 C3 帰着
いよいよ南稜へ取付く。相変らず天気はパッとしないが半日行動という事で C4 へのルート工作に出発する。赤フィックス 200m と 50m と 80m を台地へ上げ、南稜の岩まじりの稜線の fix 工作をはじめる。



山口高度の影響を受け、フーフ言って第一テラスまでの雪面で苦しんでいる。
P36 氷河がくっきりと希望のコルの下に見えてる。
遠くには、ガスをつけたテラムが、又 Siachen Gl が。
C2 からは、田中、酒、ハイポーター3名、昨日同様

C3 へむけて荷上げ。C1 からも河本、Doctor、ハイポーターが C2 へむけて荷上げ。悪天にもかかわらず、全員頂上へ頂上へと、向っている。
C3 の食料 25人日、本日 start 6日間 (4名)
C4 入れ 43人日、61 × 7日、15日まで、18日ぐらいかな?
fix seil snow bar のたぐい早く C3 へ入れて もらいたい。
C3 には 320m ほどしか fix きてない。
今朝のポツは少々やわらかすったが normal なもので、うれしかったね。
pm 4:00 の交信: 河本さん (C1 ⇄ C2 隊) の声入るも、こちらの声は入りにくいらしい。今荷上げ後半分ほど帰ったところらしい。C2 のバラサーブ隊は受信できず。
pm 5:40 5775m

①①①①

8 August, 1974

am 6:00　5760m　C3 高度

ようやく天気は回復しはじめた。この悪天中にC3を建設できた事は、今後に大いに役立つであろう。気圧も上昇しはじめる。今朝はまだ雲も多いがだんだん良くなるであろう。　8月10日、C4入りを目指す。

連絡将校㊙乾板　　井上係管

大型カメラ用、白黒　5

〃　カラースライド　2

カラーネガ　5　　合計 12

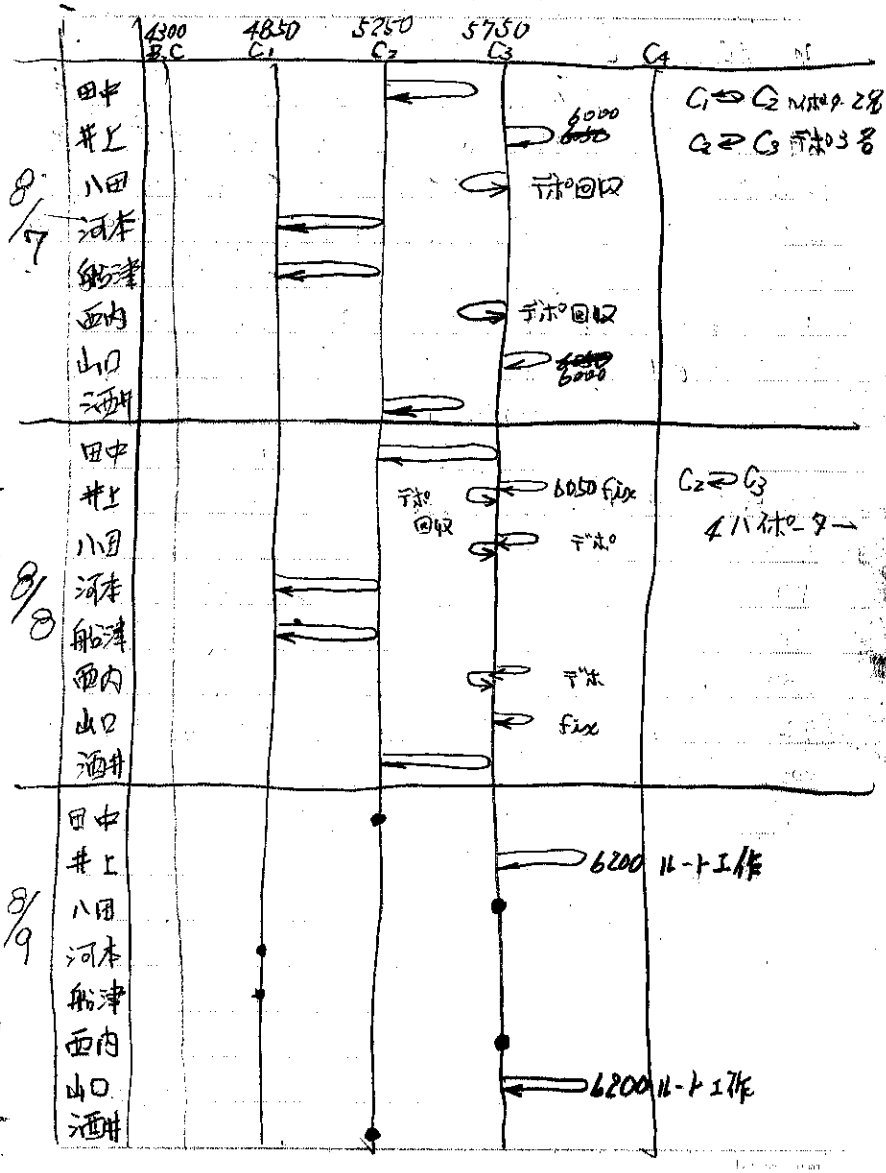
ライカ判用　白黒　20

カラーネガ　11

スライド　5　　合計 36

pm 5:00　5750m (Camp 3)

C3より高度300mかせぐ。　6050m まで傾斜きつい。



○○○○

9 August 1974

am 7:30 C3出発. シェルピ東峰南稜のルート工作に向う. 今日は6200mの第2岩峰まで何としてもフィックスザイルを伸ばさねばと山口と2人で500mのフィックスザイルをかついでスノーバー約10本ほどかつぎ重荷とたたかいながらの登攀となった。第1岩峰までは fix に導かれて9:30 デポ地点着. しかしそこからは雪ピにそっての、ゴジラおとしと fix ザイルのそうさ等でなかなかはかどらず第2岩峰のピークまであと15mほどを残して帰る (pm4:4[illegible]) 帰りは1時間ちょっとpm5:50には C3へ帰着した。

ちょっと悪天がながびいた後の快晴だけに、すべてのカラコルムの山々、特に東カラコルムのピークが一望のもとに見わたせすばらしい一日であった。しかし再び体調が悪くなり、げり、小生のげりは、ひろうと高度の影響からくるものらしい。むりをすると、てきめんである。快調だったのは、たった1の3日間だけであった。

エキストラのフィルムをさっそく使い美しいカラコルムの山々を力メラに収める。

○○①①

10 August 1974

am 12:00 Camp3 高度 5715m

今までにない激しいげりにおそわれ今日は全くの元気なし。今回の遠征もそろそろ終盤に近づき、第七つの評価と結論あるいは我々がとるべき道を決定しなければならない。

全体としての食料は8月25日でつきる。従って撤収に一週間を見ると8月17日が最終日である。かけぬけのあと7日である。

〈第1案〉 Sherpaと東峰のattack

11日. 3名or4名 C4建設 attack隊員休養
12日. 2名のattack member + サポート1名 C4入り
13日 2名 attack C3より食料サポート
14日. C4 3名 C4撤収 C3よりサポート
15日. C3一部撤収. (C2よりハイポーター)
16日. 希望のセントラルピーク attack

"評価" 我々のメンバーから言ってC4は第2岩峰の東峰よりのコル6200~6300mにおく以外はなかろう。そこからは、P36氷河から急後にそそり立ってくる雪稜を500m~700m登らねばならない。この雪稜をfixザイルなしに登下降する事は、おそらく我々の実力からして非常に危険なものとなろう。特に下降については、おそろしいものだ。C3から第1岩峰までのルートの傾斜は十分もっている。

キケンではあるが、東峰へ立つ事のできる唯一の方法である。一つまちがっても成功はおぼつかないだろう。8名の隊員のうち

Doctor. 河本の2名は最前線で使う事ができず，酒井は B.C. 入り早々左手を4ばりぬう傷を負い半月近くも使えなかった。残り5名で1ヶ月間いくら頑張ったとしても凡の集団最前線で使えるまではなかなかいかない。いきなり C2 ⇔ C3 への ice fall route そして C3 から C4 への Ridge route とも小生先端切って進まざるを得なかった。田中隊長も C2 で C1 → C2 → C3 の補給を一手に引き受けてくれたので C3 へ入って攻撃メンバーに加わってくれるのは明日からである。

今日，八田，西内を最前線のルート工作へ送ったが，はたしてどの程度ルートを切り開く事ができようか，これによって第2案が取れるかどうか決定する。又，第2 C3 入りする後さん，酒井がどの程度まで使えるかも大きな要因である。

〈第2案〉 Sheryi 東峰の attack

11日 C4 建設

12日 C4 4名入り

13日 ルート工作 2名 (attack 隊) C3 ~~[illegible]~~ 下山 C3 へ

14日 〃 2名 C4 上り

15日 〃 2名 attack 2名 C4 入り

16日 attack 2名

17日 C3 へ下山

"評価" attack が16日になり悪天に強風に引かれそうである。双の晴天という事になれば時間切れとなり食料もつぶ，残念ながらとなり又に

うほうの種で B.C へ下山しなければならない。我々の隊の目的から言ってもちょっと無理のしすぎの気もする。8名の隊員と経験度，隊の状況も考えに入れて判断しなければならない。

〈第3案〉 偵察と試登の目的は十分に達せられた。

Sheryi Gang 氷河の偵察，登攀ルートの発見が我々の隊に課せられた課題である。従って今，その目的は十分達せられたのであるから，この未知の氷河の地図の作成，地形的解明，医学的調査等に残りの日数をあて学術的価値を高めるべきである。

登るべきコル，可能性のあるピーク等へ進しできるだけ多くの写真やスケッチ，方位を集める。

"評価" 我々の隊に対する神戸大学山岳会，及び関係者が我々に期待している最低限の活動は，今日までで十分はたされたと思う。従って，ここで安全に引き返すのも価値ある決定だと思う。決して無理をするなとは，この事かもしれぬ。学術的価値を高める事も決して生やさしいものではないのだから。

小生げりでふらふらはしているが，もうすぐ後さんも C3 へやってくる。相談して決めよう。少し高所障害も出てきた様で，手がむくむ。山口の顔もだいぶむくんでいる様だ。C4 へ入れば，あと500mは高度をかせぐであろうが，幸，ひら

うもはげしく心配である。

西内、八田、C4へのルート工作
田中、酒井 C3へ入ってくる。

○○○○

11 August, 1974

井上、西内、山口 … 最高々度へ到達すべく、この3名で出発したが、まず山口が第1fixの上でダウン、西内と進む。天気は良く、Sherpi東峰の南稜はシャープに切れおち第2岩峰まで約700mのfix ropeがはられている。第2岩峰からナイフリッジが岩混りに少し下り気味に、P36氷河側へ150mほど進み広い雪のテラス(10m×50m)へ続いている。

前回、八田、西内が伸したfixは200m程度、我々のfix白の残りと赤100mほどがP36側の急斜面に岩の出たナイフエッジをさけて、のばされていた。もう少しで東峰の大きな雪の壁まで達する所で終っていた。これをのばして雪のテラスへ出る。
少しラッセルして6300m地点まで到達する。
帰りはfix資材の内カラビナ~~ハ~~類のみ回収する。

①①◎④

12 August 1973

沈. C3では、常に Sherpi Gang の方から風が吹く。
顔のむくんでしまった山口、西内をC2へ下らせる。
Sherpi Kangri 7380m 本峰は、西峰とも言える。東峰だけでも登りたいという希望をもって、東峰南稜に取付き4日間ほどルート工作に頑張ったが、けっきょく1000m近いfix rope を使用し、C4予定地までルートを開いただけで我々の力がつきる事となった。
今日、登頂を断念して、7月17日B.C.建設後約1ヶ月ルートを求めてきた Sherpi、7000m峰の大きさをいやという程思い知らされた。あと15日間の日数と、1000mのfix、それを伸せる2名の strong members。これだけあれば、東峰は登れる。C4建設後、一担C2へ下り休養後、頂上へのattackを行なえる。小生の設計図である。

7. 11.	3840m	仮B.C.
15.	4300m	B.C.
21.	4850m	C1
30	5250m	C2
8. 6	5750m	C3
11.	6250m	(C4)

Camp進行の time table である。この speed では少し遅すぎるから、メンバー的に補強しなければ Sherpi は登れない。stをかけたのもきんざらまちがいではないだろう。

①⊙⊛⊛

13 August 1974

小生のみ氷、田中、八田、酒井、P36のコルへ。天候悪化のためSketch Map作成のための良いDataは期待できず。
西内、山口をC2へ下山させる。山口は11日の行動で顔がむくみ、何ともいたしがたい。西内は精神的に、きいっている。
西内、Doctor、Sherpi Gezdern のコルへの氷河を偵察する。八田、酒井の両名、P36氷河へ少し足を踏み込む。

⊛⊛⊛⊛

14 August 1974

C3撤収日　C2から西内、Doctorが5名のハイポーターをつれて雪の中、第4ice fallのルートを、うめられたfixをおこしつつC3へ。

C3からは、小笹、八田2名が10:00st、12:00ごろおろロで会う。はげしい雪の中C3を一気に撤収しようとがんばってみたが、C2からのサーブに元気がなく、けっきょく日暮になってしまい、おまけにDoctor、西内ともラテルネさえ持たずに行動しており、C2よりpm7:00八田、小笹で敬隆に登る。雪激しく、夜のとばりの中、下からは、ハイポーターをはげます声をかけ、20本ほどのポールを持って進み、約30分後やみの中を右往左往する5名のハイポーターと、西内Doctorを収容する。続いてfixを撤収しながら下降してきた田中、酒井と合流、pm9:00 C2へ帰る。C4用のテントをC2へ張り、人数を調整させる。

ここでも西内は疲れを理由にテントを張りしぶる。しかし遅くはなったが良く頑張ってくれたDoctor、西内、ハイポーター5名、アッチャである。

第4ice fallの上部落口あたりは、水雪と新雪のためヒドンクレバスがわかりにくく、4〜5回、足をつっこむはめに合う。けりで絶食して歩いているというのに、八田さんもきびしい時には役に立たない人だと思いつつ、トップですぽっすぽっとクレバスに足を入れる。チムニーの下りも、力は入らず、ずるずると、ユマールの世話になる。しかし、それでも、夜になって撤収パーティが帰らなければ、むかえに行かねばならない。しんどい役目じゃわい。

日本へ帰って食いたいもの.

8/4. 井上 いかのバター焼き

〃 西内 富山のトンカツ "たっちゃん"

〃 小田 元町 "やき鳥 ーへいっ"

〃 山口 さざえのつぼ焼.

まったけを焼いて. すにつけて食う.

15 August 1974

pm 3:00 ポン げり
am 11:00 ポン げり

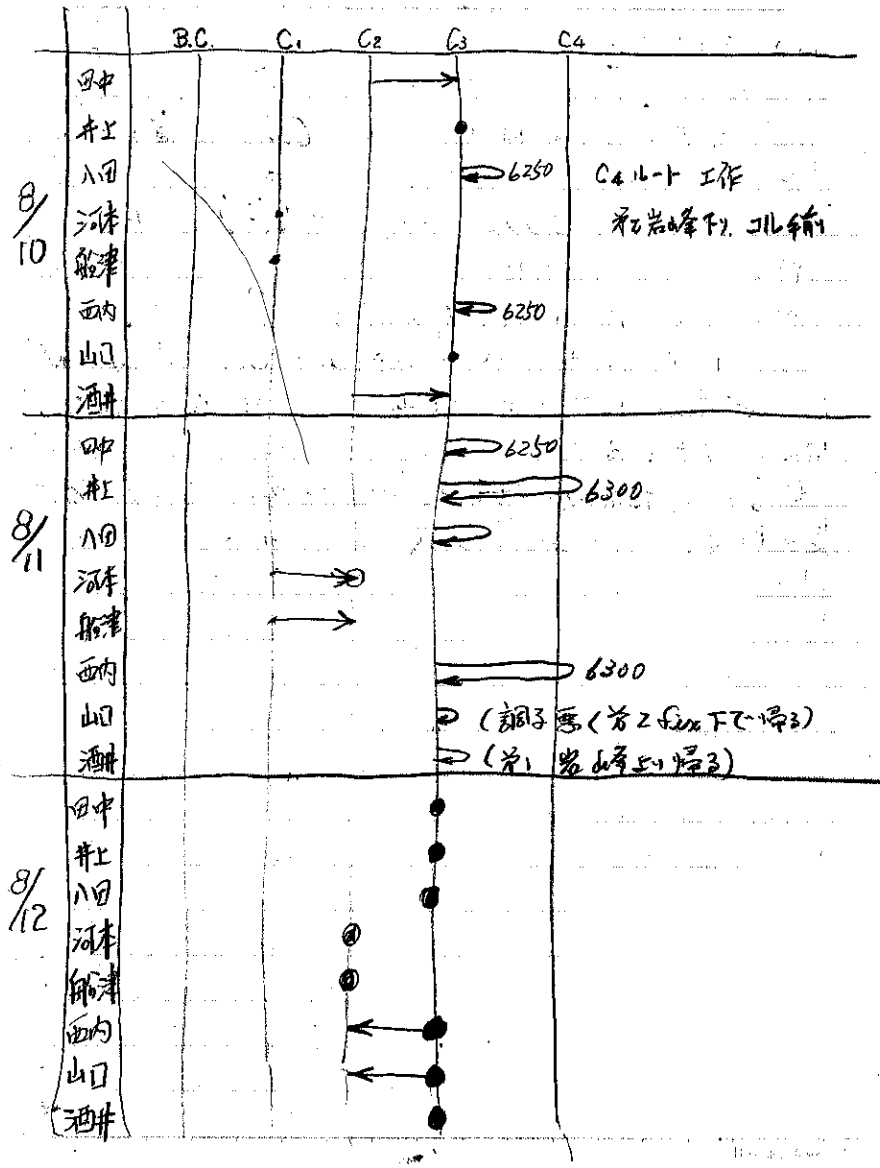
八田、酒井 12:30～昨夜ハスポーター達の残して来たC2撤収デポの回収へ行く。（C2からは1ピッチの所全員すぐに帰ってくる）

夜 dinner に Captain のあげていた卵を使い、牛どんぶりを作る。これはうまかった。

久しぶりに下ってきたC2、やはり空気のうまさが気につく。Doctor がC2入りした時、さっそく examination、まず normal な心電図取りから血圧、その他。八田さんは、顔のはれを水分のとりすぎと診断され、1500 cc の摂取量に制限された。

登頂断念後の我々の仕事は、少しでも多くの資料を持ち帰る事。まあ皆さんがきんしゅう頑張って下さい。

負荷心電図は、C2から ice fall へ向って、10分ぐらいのラッセをやらされる。それが歩きながら自覚病はようようを言えのないのと苦しい事この上ない。後さんは、テストの後豆腐がたいいたいと連発していた。



⊗⊗⊙①

16 August 1974.

八田、西内、及びハイポーター5名 C_1へ帰らす。雪も激しく降っていたが、20日B.C.全員集合を決定した以上、行動しなければならない。C_2の撤収は3日間が要であろう。ママチョは、雪もうにやられ使いものにならない。C建設のおりも高度の影響を受けて、ゲーゲーやっていた。

ハイポーターを先行させたところ、全くもう、よっぱらいのトレースをつけてしまい、見られたものではない。

C_2のすぐ下には、水くたまりができており、C_2の炊事はべんりしごく。うまい水もものめる。くみに行くのにちょっと危ない、はまった人もいる。

秋色こくなったせいか、夕方5時をすぎると急に冷えてくる。この寒気を利用してice creamを試してみた。卵3個、ミルク、25サ、砂糖10サジに水でコッファー(小)一ぱい近くのアイスクリームのもとを火にかけて作り、テント入口左側にセット。10分ごとにかくはん。pm3:00～pm9:00約6時間でソフトクリームぐらいになる。ウェファーをつけて食べる。実にうまい。

Captainのアンダーもなかなかいけるではないか。C_1では山口がマムーン相手にヒーヒー言っていたわけだが、まあゆるせ、帰りのキャラバンも楽しくいこうぜ。

○○①⊙

17 August, 1974

今日は小生誕生日。Sherpi Kangriの西稜へのルートを求めるべく、先日Doctor、西内で偵察した、ジャンダルムのコルへ、酒井と行く予定で、C_2を8:00出発。

トレース($C_1 \leftrightarrow C_2$ ……ハイポーターがつけたためかたかたのもの)を外れて少し酒井がラッセルし、小生が声をかけるとすぐ交代したが、案の定、吐いて高山病をうったえた。

かくして我が誕生日の夢ははかなくも消されてしまい、C_2へすごすごと引き返してしまいました。

今度は10:00前から、バラサーブ、Doctorと3名でC_2上部の第4 ice fall帯の残置fixeの回収へ出発した。

pm5:55 八田、酒井 C_1下山着。

18日予定 $C_2 \rightarrow$ B.C. 田中、山口

$C_2 \rightarrow C_1$ Doctor、井上、

$C_2 \leftrightarrows C_1$ 河本、八田、

$C_1 \rightarrow$ B.C. 酒井

$C_2 \leftrightarrows C_1$ ハイポーター3名

後さんの調子は相も変らず悪い。Doctorもラッセルのあとをついてくるだけ。となると小生ラッセルに精出さねばならない。

C_1よりC_2撤収にやってきた山口と酒井はさっそく交代させる。酒井は5000m以上では使えない事がはっきりした。山口も心電図(負荷)を取るためちょうど良い。

小生の誕生日だと言ってDoctor、山口が夕食を作ってくれた。

18 August 1974

am 10:00 C_2 5260m

8:00 起床. C_1からハイポーター達がさっそく3名やって食料の残り、その他をC_1経由B.C.へ撤収させる。

10:00の交信. 八田. 河本. C_2への途上ジャンダルムの下から通信してくる。田中隊長. 山口. B.Cへの帰途につく.

朝食は卵おじやにもち3枚. 紅茶. ゆで卵といけっこうウマい.

隊長. 山口を送り出してから. C_2用の6人用テントを撤収する. グランドシートは. よく. そうじしておく. 10:00ごろからテントをたたんでしまい. 八田. 河本のサポート隊のつくのを日射の強い中Doctorとぼんやり待つ. 大阪医大の山岳部の現状についてなどDoctorから話しを聞く.

いざ荷物を作ってみると. いっこうなもの(細)フィルムでC_2風景をとり. パックする(ミルクの中). C_2からC_1へは実に久しぶりの道でコルコンダスの谷もなつかしい。今すべてをおえて下ってくるわけであるが. 氷の状態もかなり変化している. C_1はすっかり雪もとけて. 岩の上にテントが張られていた。

夕食後. クリノメーター測量のデータを整理し測量の残り予定をたてる.

日本からの手紙を河本さんが運んでくれる. 3通. 参院選の結果の新聞の切り貼きまで入っていた。

おれやされやと母も一人で元気にしているようだ. 暑さにまいって9日につかれが出なければいいんだが. 外生からの手紙はまだついていないらしい.

19 August 1974

~8:00. 4875m

9:15. Camp 1 start. 平板にて方位を取るために Sherpiの主氷河と西氷河の分水嶺のコルをめざして西内と出発する.

8:00 ハイポーター全員がB.Cより やってくる. 全員重い荷をもってB.Cへ帰っていった。ザイルをつけずにC_1へやってくる.

C_1の住人は. 今朝河本. Doctorが B.Cへ帰り. 八田. 井上. 西内の3名となる. 今日は. 5280mのピークとも言えない様なピークへ登り. 平板をSet. 特にサルトロ. シェルピの分水嶺と. 逆のK6, K7方面. シェルピ. カベリのリッジ等の方位をアリダートで取る.

西氷河とのコルは. 高度5150mほどで雪がきれいについたやさしいコルである. コルの少し手前の尾根をラッセルして小さなピークへ立った。K7及びリンプサール及びバルトロ方面の写真を撮ったり. 方位を読んだり 12:00 ~ 14:00まで楽しい2時間を過す. 第2氷河の上を包んでいた汚れた雪もすっかりとけて今日は. 3本のモレーン(medial)もはっきりしていた。Moon light peakから派生している尾根の末端には. 緑の大きな湖ができていた。昨日. 西内と偵察した第3氷河奥の. 西稜の方からおりてくる小さな氷河の出合の岩峰は. インゼルに変っていた。

今日のPeakからは. サルトロ. カンリの雄姿がいっそうひきたって見える. サルトロ. シェルピの稜線の続き具合. その間の4つ(3つ見えていた)の6000m峰の位置. シェルピ・ラがその右のパスよりも100mほど高い事. シェルピ・ラへのice fallが最も悪い事等. よくわかる.

シェルピの Gendern 1峰. 2峰. 3峰も東面. 2峰いわ

ゆるトサカは、幅も更に狭く、切れ落ちた花崗岩の壁が一気に1000mも氷河まで切れおちている。ちょっと他に例のないすばらしい岩峰である。

明日は、いよいよBCである。

○ ① ① ②

20 August, 1974

C1. 7:30 4865 m

いよいよB.C.へ下山。今日は解散Partyを計画BCへ帰る。B.C, C1間の氷河のルートもすっかり雪がなくなりモレーン帯もくっきり。かえってベヤーアイスが美しい。P1ポイント、すなわちキャラバン・ベースの上の丘で方位を取る。これは西内にまかせる。

帰ってきたベースは、日本とPakistanの国旗が色あせた程度。それに大く流が切れた程度で変化はなかった。7月23日BCを出発、C1へ入ってからほとんど1ケ月近く、帰る事のなかったBCである。

すでにlow portersさんがBCへやってきていた。明日は、さっそく、帰りのキャラバンに出発する。

ひつじの串やき、ビールパーティ、ハイポーター、リエゾンオフィサーを加えたキャンプファイヤー ウィスキーにより、楽しく歌いおどり、明日はもうキャラバン

P1 pointで方位を取り、いよいよ我々の地図作成の仕事も終了する。Sherpiの西側の分水嶺の状態もワークマン以来、不明であった点解明したし、サルトロ↔シエルピ間の山岳のつながり、Sherpiの稜線もほぼ明らかになったわけである。

P1の登りのfixルートは雪がほとんどなくなって、岩登りもさせられる様なルートになっていた。はしごや補助fixを使えばもう少し楽に登下降できよう。ここでしばいこのシュラフがおっこち、登り直しをやらされた。

21 August 1974.

キャラバ B.C. へ別れをつげて、半の谷氷河を横切って、手前のキャラバーから チョンギ・ラへ、チョンギ・ラ からの展望わすばらしさ、穂高から上高地を見おろす様なすばらしさ！ 麦が黄色に色づいて コルコンダスはすばらしい。 昨日、雪と岩の世界 からおりてきたばかりの B.C たった一夜で去るこのさびしさよ。一日ぐらいは ゆっくりと Sherpi Kangri と対話して、私の心の整理もしたかった。

4500 m の チョンギ・ラ から 下のアブレーションバレーまで 800 m の下りは 実に長く、急である。途中の氷場は 一ケ月以上 たった今も ちょろちょろと岩清水をたくわえていた。ルンゼから左手の カレ へ廻り込むと、Rose slope シャクナゲが今花盛り。ちょっとほこりっぽい下り。

Zogo からの氷河の出合は、増水で Rope を張って ローポータ達をわたしている。假等スボンをぬぐと フルチンで腰までつかって氷河のドロ冷水の中をわたってゆく。Captain 頑張って あれこれやっていた。ここから少し下ると もう一本、急な谷が入ってくる。わりと いい水がたっぷり、アブレーションバレーに 入ってくる。ウイローが一本。ここで昼食。コルコンダス バター をクラッカーにつけて食べる。

高度 3600 m。もうずいぶん下ってしまった。ここからは、この水流にそって アブレーション Valley を下り、氷河の tongue おりていく。左岸ぞいと比べて 楽しい道だ。tongue まで下ると、又、美しい流れが出てきて、それにそって下る。あとはアウト、バーストの道をコルコンダスへ。実の秋のコルコンダ麦が美しい。

Sherpi Gang Glacier 末端高度 3450 m

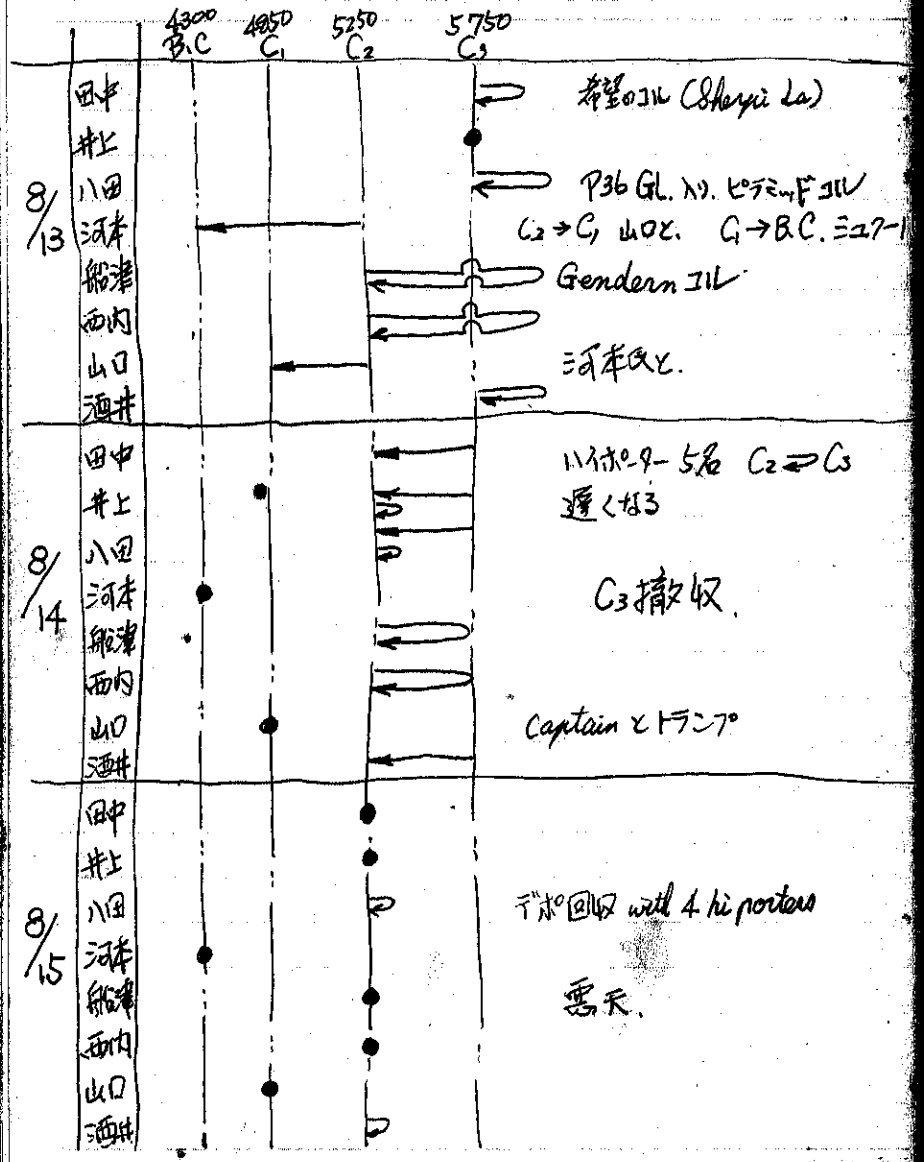
エンドモレーンの形成が見られないのでこの氷河は、毎年少しずつ後退しているはずである。後退速度はコンスタント。

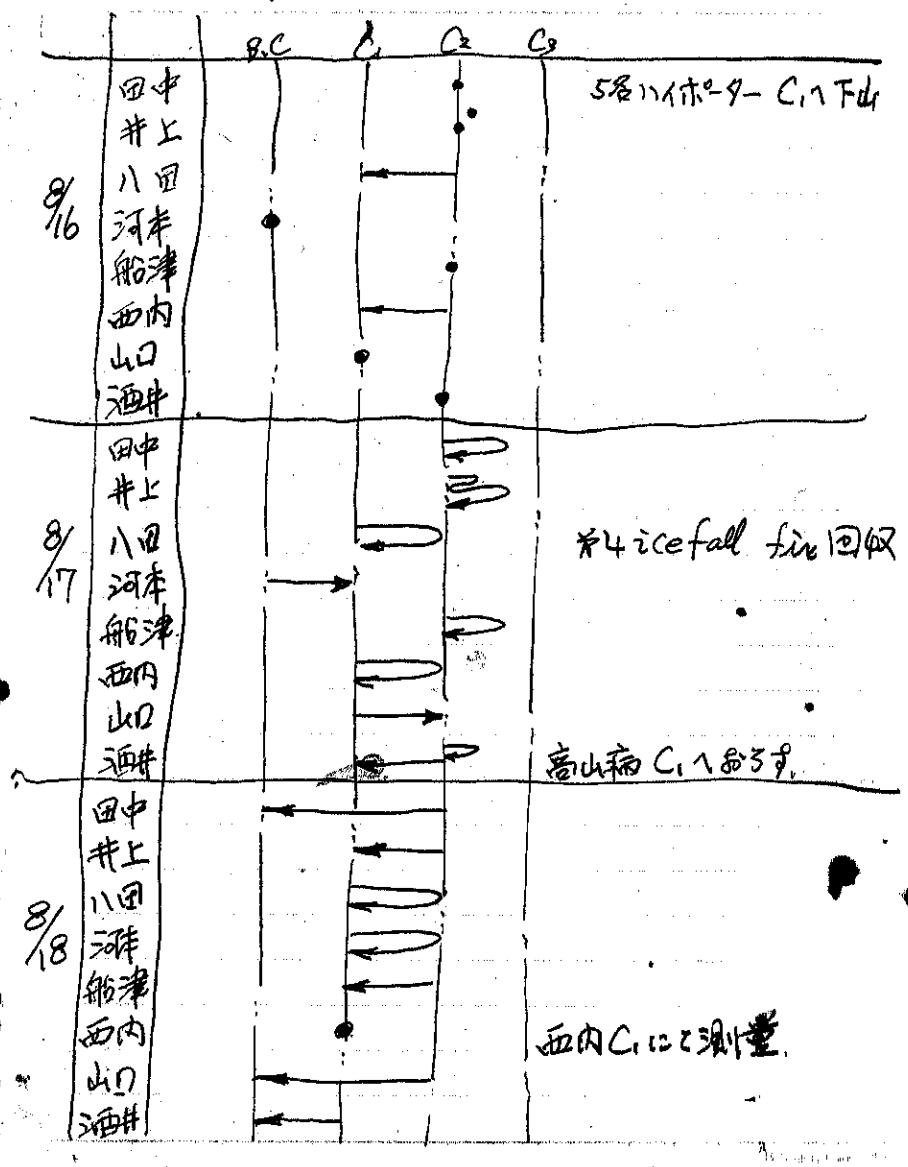
ひつじ	1	80 RS	ラブリー 10 RS
卵	37	20 RS	
野菜	肉		

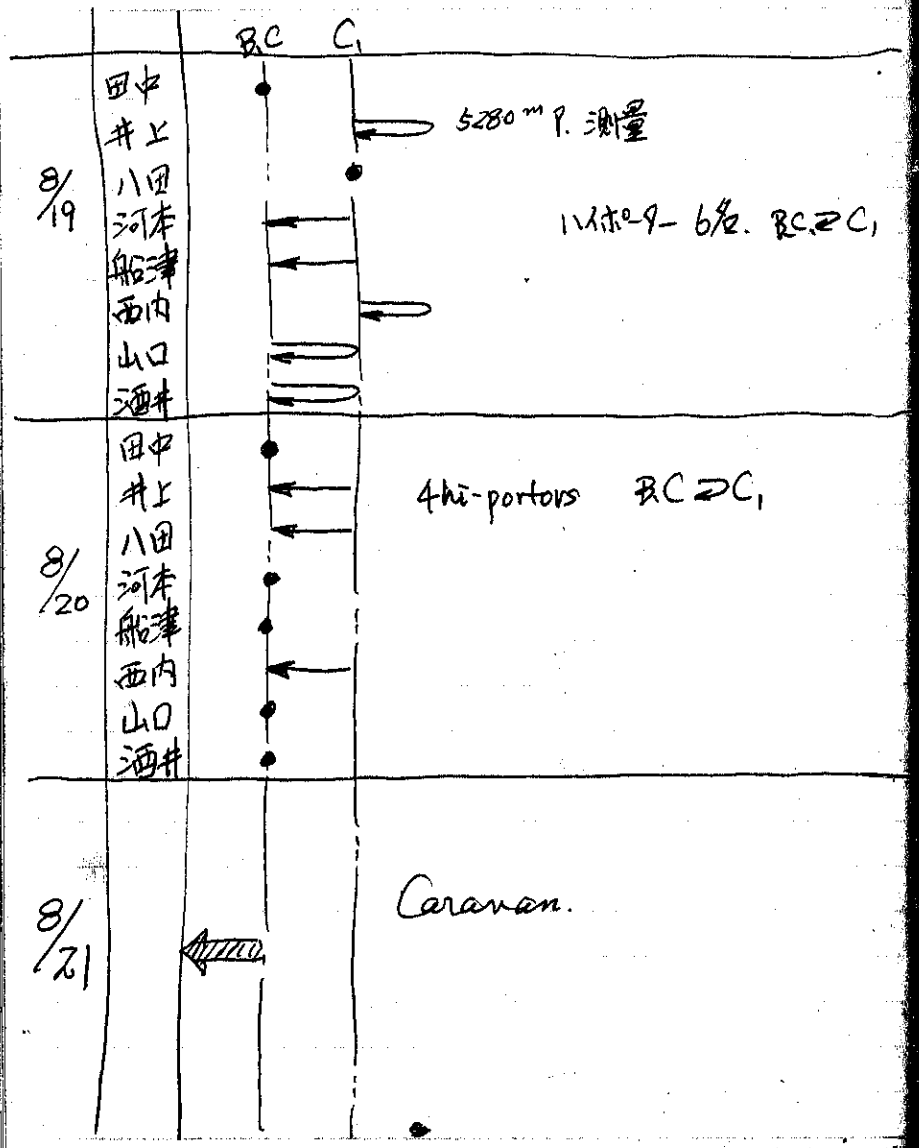
コルコンダスの キャンプは 橋をわたって すぐの所。入山の時は、滝の所まで入ったが、帰りは明日のこともあるし、川のすぐそばにとまる。再び シッカバンブ。帰りのキャラバンは、あわれな羊がたくさん出そうである。

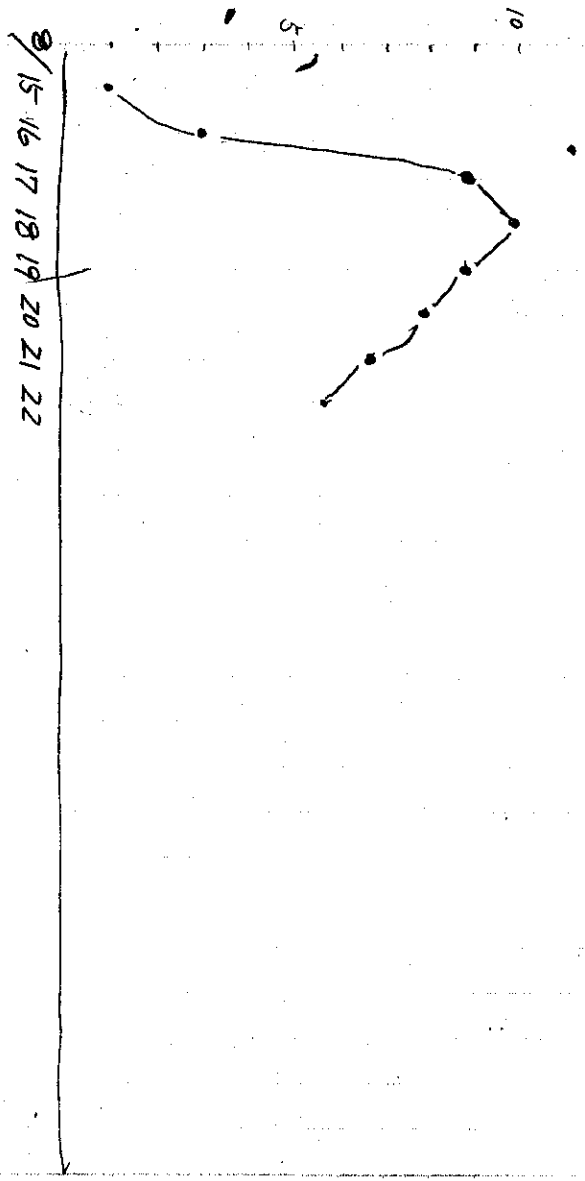
コル・コンダス 高度 3290 m

帰りのキャラバンは早い。入山のときは、コルコンドから 仮B.Cまで一日かけて 入ったが、B.Cからコルコンドまで一日。しかもゆっくりとである。


4300 B.C
4950 C1
5250 C2
5750 C3
8/13
8/14
8/15
田中
井上
八田
河本
船津
西内
山口
酒井
希望のコル (Sherpi La)
P36 GL. ハリ. ピラミッドコル
C2→C1 山口と. C1→B.C. ミュアー
Gendern コル
河本氏と.
ハイポーター 5名 C2⇄C3
遅くなる
C3撤収.
Captain とトランプ
デポ回収 with 4 hi porters
悪天.


B.C
C1
C2
C3
8/16
8/17
8/18
田中
井上
八田
河本
船津
西内
山口
酒井
5名ハイポーター C1へ下山
第4 icefall fix 回収
高山病 C1へ帰る.
西内 C1にて測量.


BC
C1
8/19
田中
井上
八田
河本
船津
西内
山口
酒井
5280m P. 測量
ハイポータ- 6名. BC⇄C1
8/20
田中
井上
八田
河本
船津
西内
山口
酒井
4hi-portors BC⇄C1
8/21
Caravan.


天気変化曲線
5
10
8/15 16 17 18 19 20 21 22

①①◎◎

22 August, 1974

8:00 コルコンダス発
10:30 カルマディン着. 12:40 高度 2980m

Sherpiに最後の別れをつげ、コルコンダスからカルマディンへ下る。帰り道は早い。例の右岸のおにのつのを見ながら、トントンと下るとすぐにカルマディン。昼食に着、河本さんは、花へ行ってしまった様である。コバニが実にうまい。昼食には、ホットケーキ、ゆで卵チャイが出る。Doctorはさっそく、Hoteltelを開業。実にごくろうさん。K7、リンクサールの山群を見たかったがあいにくの雲。ここまで下ると暑さを感じだした。Starというシガレットを手に入れる。K2よりまだ悪いたばこがあるとは知らなかった。しかしZ[illegible]もしたらしい。バターもない。このカルマディンでたばこを手に入れたカナ、サブ山口の手めんも上々である。

キョゴルにてキャンプ。コバニーのうまいやつ、じゃがいも、ダイコン、卵、その他りんごたばこ等買い込む。

cookフセインのきめたキャンプサイト。Captain気に入らずルルー先きまで進む。リンゴは食べすぎるほど食べる。じゃがいもは、ゆがいて、コルコンダスバターをつけて食べる。これもうまい。

リンクサール、K7等カベリ谷コンダス谷の山は少し雲がいが多くカメラに収った。キョゴリザはすその方だけ見える。Doctorは、カルマディンに続いて開業。実に忙しい。西内をアシスタントにつける。卵等、けっこう副収入が多い。

2時間近くもやっている。毎日続くとたいへんな事になる。[illegible]食は、コワトリのすきやきらしい。

カラコルムの山は厳しい。

苦しい日々が続き、肉体はさいなまれ

精神は疲れ切ってしまう。

それでも山は美しい。

楽しみは、求めるものではなく、

そこに見付け出すものだ。

楽しい山行であった事を幸せに思う。

1974.9.22.

①①①①

23 August, 1974

チョゴリレは、カルマディンから1時間ほど、左岸の町であった。
朝、start 今日の行程はブラコールまでである。
昼食は、行きのキャラバンと同様、ラシットであった。ホバニー、リンゴ等食べる。アル(じゃがいも)にコルコンドバターをつけたのも実に良い。コバニ、リンゴは、げりをするだろうとの事であるが、もうかまってはいられない。食べるだけ食べる事にする。
朝出発する時、カナ、サーブ、山口君がウェフマーと、ゆで卵、それにチーズをくれたが胃が大きくなったせいか出発と同時にそれらもなくなる。チョゴリレからは、また砂漠に等しい道である。ラシットから、カンターリ、ナーラの東が見えるが、すでに稜線の雪も消え、すっかり、がら、がらの山になっていた。東の秋、マタ、アル等。
ブラコールはもうコバニーを取入れて、なかった。
Chogo Gron.(チゴルン)は、コンダスという集落の中の一村である。小学校もあるそうだ。ポーターからきき上げた柳のつえを手に、カメラセットを持って、ブラコールへのCaravanに入る。村の少し下手で橋をわたり、右岩の水ぎわを進む。やがて、かつては氷河の床だったであろう所の河岸段丘を歩き、Lachitへ入っていく。Lachitの手前で朝早く出発したコルコンダスのマッチャポーター達に追いついて、Lachitの森、オアシスの中へ入る。Lachitの昼食場では、ラシー(ヨーグルト)、ゆで卵、チャイ、etc それに、コバニー、リンゴ(セイブ)と、食べる。
ラシットを出て、カンターリ、ナーラの橋をわたり、少し、巨岩の登りを進み、大石の積重なるの下りを、ダンサム川の出合ブラコールへ、下った。

① ① ① ①

24 August, 1974

Brakhol → Tagas

コバニーとリンゴの食べすぎ. はてきめん. げりである. 2回行く.

ハイポーターの中でママチョ, エブラハムが私設ポーターをやとっているが. タガスと. サリンで明日は. ウルサからショークルートを取る事となり. ポーター代が高くつくので 35 RS プラス先に支払ってやる事となる. 玉ねぎと. トマト食べる.

Liaison Officer が. ショーク. ルートに. ワイヤーロープがあり. これを使うと. 一回 4人の人員が渡せると言う. それで増水して. ウルサ. サリン間が通れないのをカバーする事にするつもりであろう. ハイポータ達は. 反対していたのでもっとよく確かめろと言っておく.

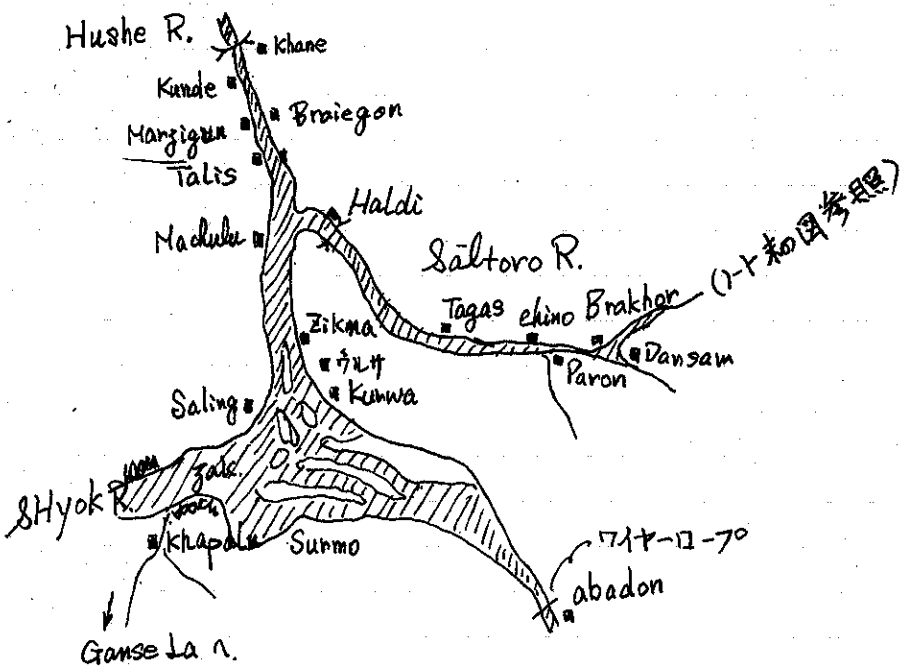
Chino では. Doctor, 西内の私設ポーター. Mohammed の家の前で休み. 白ぽい コバニとブドウを食べる. 彼は家から ガラスのコップを持ってきて我々に Chino のアッチャパニーをふるまってくれた。 小学校があり. 田中隊長らが 1時間近く. 訪問しあれこれ聞いてきていた。 Chino から Tagas へは. 河原. そいに. Toldi を Pass して進む. Tagas は. 行きは. 良い水が流れていたが今は. ドロ水と化していた。 Mid summer の氷河の融水のせいであろう.

Doctor も気分イライラ. か. 何か知らないが. コーポーターが中ったで道をあけろと. 体をこづいたとか何とか. 大きな声でドナッていた。 おとなげないはなし, 後さんと. Doctor も疲れを見せたなと話す。 メルランナーに Tagas で会った。

① ① ① ①

25 August, 1974

Tagas → haldi → Braiegon → Khane → Kunde → Marzigun → Talis



タガスから ハルディへ出て. 往路 Caravan route のウルサからアバダンルートを取り. ワイヤーで Shyok River を渡る. Liaison Officer の計画は Haldi でパーとなり. Khane まで Hushe Nala を逆登り橋をわたる ノーマルルートを取る事になった. キャプテンの文明への帰着願望は. ことさら強く. Talis までキャラバンを進める.

夕方 7時ごろ タリスへ着く. タリスは. 良い水がある.

①①①①

26 August, 1974

Talis → Matulu → Saling → Khaplu

キャラバン最後の日。もう終りかと思えば、遠くなったSherpiの方をかえり見ずにはいられない。フーシェの奥には、マッシャーブルムが美しい姿を見せていた。

Salingでは、ハイポーター、イブラヒムの家へまねかれ、ハルブサ、ブドウ、リンゴ、チャイ等のサービスを受ける。ポーター頭のマディ氏にも再会する。往路キャラバンのポーター達にも会い、キャラバンの終りにふさわしい、シーンがあちこちに広がる。早朝、酒井、エブラヒム、メイルランナーの3名をザークの手配のため、先行させる。メイル・ランナー サラームは実に良い男で、ザークの手配その他、雑用をいろいろ引き受けてくれた。

ザークの寝し場は、さすがに、増水し、Khapluが遠くなっていた。たった6台分、3回で4時間近くかかり、全部の荷物をわたす事ができず、Satparaの Hussain及び、メイルランナーのサラームを軽テントに残し、ザーク全員Khapluへわたった。案の定、せっかく先にわたった山口は、たいしたものを手配せずにボソッとしていた。

カパルへ帰ると、jeepの音がとたりして文明のにおいが強くなる。夜は、カレースープにやき鳥、等でキャラバン最後の夜をすごす事になった。

日暮のザークは、川の流れをはっきりせず、空気がだんだんぬけて、不安なjoint jakに9人も乗って、こわごわShyok Riverをわたった。

①①①①

27 August, 1974

Khaplu滞在。

朝からJakのわたしを待ちつつ荷物の整理をし、jeepの手配から、certificationの作りに入る。レストハウスのliving roomに入り、測量用のケント紙を使って、日本語、英語のCertificationを作る。俊さんに日本語を担当してもらい、英語とformを卜生が担当する。

この国、Pakistanの情報網というか、きき回る早さはおどろくばかりである。マラン氏、ライオンの息子がB.C.で死んだという事でLiaison Officerがとっちめられる事になった。

レストハウスには、3人のnursesと2Doctorがやってきており、LiaisonのMamoon君がそのしりを追いまわす事となる。

レストハウスは、満員で我々はテントを張ってとまる事にする。汚たくやら何やら、けっこうかしましい。思えばCz撤収のときからKhapluまで一日も休養なしである。

certificationは、

Satpara	Gholam Mohammed		
	Hussain		
	Assad.		Kande Mamacho
	Shakoor		
Saling	Ibrahim		
Khaplu	Hussain	cook.	
Saling	Mohammed	Ali	assistant cook. mail runner

のものを作る。散髪屋がテントにやってきたのでクルピーでやってもらう。ひげも手入をやってもらい、さっぱりする。certificat

を要求してきたので酒井に書かせる。

Zak 料金　1回　15RS

total　10回　150RS

Zak運搬 porters　13名 × 10RS（半日）　130RS

Total　280RS

ザーク料金は、往路 5RS であったにもかかわらず 20RS を要求される。Liaison Officer いわく、京都大学隊が我々の 5RS 料金をスポイルしたとの事であるが、京大の荷物は約70名のポーターがはこび 3日間かかって 700RS 取られたという事。

そこで京大隊岩坪さんへ、手紙を書いて、Chino の Mohammed にたくす。彼は、Doctor、西内が私設 Porter として雇っていた男であり、これからサルトロを登り、京大隊の方へ行くという事であった。Khaplu では、いちいち cook Hussain の1日の代りに買出しの手伝いをやってくれた。俊さん、Doctor 西内のせんたく等も、小生もズボンを洗ってもらう。

いよいよ Expedition もおわり、レストハウスの living room へハイポーター 6名、assistant cook 1名、を集め、Liaison Officer 立合いのもと、田中隊長、井上副隊長、河本マネジャーで給料の支払いを始めた。certification ワッペンを田中隊長より手わたすと、ハイポーター達は、うやうやしく受取っていた。

今日は、サーブ達と全員、テントにとまってくれるという、なかなかのサービスぶりであった。もっとも物ねだりのためが 80% 程度であろうが、中には Assad の様にしっかりと金の番をしてくれる者もいた。

①①①①

28 August, 1974

田中隊長、山口　スカルドへ。（1 jeep）

United Nation の jeep に 10 baggages 来る。

早朝起床し、すべての Baggage を、jeep 用に作り、stand by する。Liaison Officer の charter した jeep はいっこうに来る気配もなく、バザールで一台手配する。これに隊長、山口が乗り、出発してしまう。我々は、レストハウスに入る事にし、ガレージに荷物を入れ、レストハウスの中庭の木の下でのんびりすごし、手紙書きにせい出す。

Liaison がレイ子の事でつりざおがいると言ってグラスのけい流ざお 1本を 100RS で買っていった。その 100RS は、あとでわたすとの事である。彼はひまな時は、例の nurse 3人（我々がスカ・コバニといっている連中）のそばにいて、全く遠征隊とはなれてしまった様である。

夕食は、レスト・ハウスのチョキダリ（ハウスキーパー）にたのみ、チキン 3羽と、チャパール、アンダー ピアース、等を買い込りポイルド・ライスと、ローストチキンの Pakistan 風のやつを作ってもらう。6名うまそうに食べる。手を使って食べるパキスタンスタイルを皆に教えたりする。

夜は、レストハウスのしばの上にシュラフを広げてとまる。月の美しい夜であった。リンゴの食べすぎで夜中に2回ほどポンに行った。

①①①①

29 August, 1974

Liaison Officer のチャーターした jeep 1台にほとんどの荷物を積込み、井上、八田、西内が乗って行く。他の3人河本、Doctor 酒井はバザールに行って、タクシージープをひらう事になったが、けっきょくは 400RS 支払ってチャーターしてしまう。

Khaplu → Skardu は、往路夜で良く風景を見る事ができなかったので楽しいジープの旅となった。Shyok 川ぞいのジープロードを、けい気良くとばして、途中チャイ1杯に2度ほどより、チャスと、チャワール、オムレツを食べる。

Jaglote から Skardu へやってきた時は、ずいぶん広い flad に感じたが、カパルから帰ってくると、そんなに広くは感じなかった。スカルドの裏山には、氷河も少しあり、サトパラ湖の方からは美しい水が流れてくる。

レストハウスへ入り、一段落である。リエゾンオフィサーは、例のレイ子の件で forest manager にしぼられている。今日は、Khaplu 止りであろう。それにスカ・コバニ嬢達の相手もあろうし、けっこうな事です。

リエゾン、ハスポーターもいない夜を久しぶりにすごす事ができ静かな夜である。Skardu は、大きなバザールがあり、何でも手に入りそうであるが、何がないかにがないとけっこうくらしにくい。肉は早朝にバザールに行かないと、手に入らない。バザールをうまく使うのがスカルドでくらす良い手であると思う。

①①②②

30 August, 1974.

Skardu 滞在.

早朝起床、air flight 用の荷作り、P.P.バンド掛け等やって、P.I.A 空港へ行く。New バザールで jeep を charter し、(100RS) 9月3日、4日、5日、6日のシートをリザーブする。荷物は3日に空港へ運び、P.I.A が Keep してくれる事となった。3日まで、スカルドでゆっくりすごす事にする。

昨日からスカルドの sand storm を経験した。サトパラの方から強い風が吹く。原因は、スカルドフラッドの日射による気温の上昇と、山岳地方の冷たい風の混合による乱気流がそれであろうが、これをくわしく調べるには、ちょっと大がかりな調査がいると思う。

暑くなって、夜シュラフから出てねていたためか、かぜをひいたらしい。久しぶりに、昼ねをする。夕方、ボーイ・スカウトの親玉にティパーティにさそわれ、しばと、岩と木と、美しい泉の庭を案内してもらい、切手をプレゼントしてもらい、又、チャイ・サービスを受ける。ヤクをかっていて、はいけんする。日本にもやってきた事があり、なかなかの物知りである。

Mr. Sadat Mangil
Skardu, Baltistan, Pakistan
Mr. Syud Taqi Mohsin
19 Abbot Road,
Lahore-5, Pakistan

Liaison Officer が Khaplu からやってきて、P.I.A. にかけあいに行ってくれるがだめであった。

31 August, 1974

午後には、Sand Stormがやってくる。

かぜを引いて、げりをして、完全にグロッキー 絶食し、シュラフに入って一日中ぬている。熱も37°8′ほど出る。げりの方は、体調を整えなければなおらないようだ。それにコバニー、リゴブドー等が悪いらしい。水も関係あるかもしれない。とにかくひどくなると腰がいたくてたまらない。

Liaison河本の2名、空港へ交渉に行くが flight なしで Office close 何にもならない。明日、軍の輸送機がやってくるという事で、これをアレンジするつもりらしい。さて、中い殿の実力のほどは？

八王寺の、ライラ Party がスカルドへ帰ってくる。トラクターで空港へ直行、キャンプする。trecker 4名がレストハウスへやってくる。バルトロ、コンコルディアへ行ってきたそうだ。

Liaisonの上司メジャーがつりに行くとかで、河本さんもついていったらしい。Indus trout を食べさせてもらったらしい。八王寺のパラサーでといっしょらしかった。夕方7時ごろレストハウスへ帰ってきた。

ここ2,3日 天気が悪くなってきたので フライトはない。3日から予約してあるが、だいぶずれ込むのではないだろうか。ピンディへ帰れば、Hotel代も高くつくし、まあ、待たされるのなら、スカルドの方が良かろう。

夕食は少したべる。雑炊だったので腹には良い。しかしあとで野菜いためを食べたりしたのでまずかったかもしれぬ。酒井もかぜを引いているが、彼は、せきもひどい。その他 げりの連中の多いこと。

1 September, 1974

6時、良くぬたせいか目がさめる。頭のいたいのはとれたらしい。熱の下った、いらの方は、相変らずゴロゴロいっている。腰もまだいたい。八田さんから個装リストの作成をたのまれていたのでそれを作る。

7時半 オラム・ラッスールがやってくる。

にわとり2羽 小生のポケットマネーで買う。70RS payment 済。

昼からガリーを charter. Satpara の町へ行く。Skardu から南方へジープで40分／サトパラ湖の上流にある寒村で、ちょうど、そばの花が咲き乱れていた。この谷は上流に氷河がないので水が美しく、サトパラ湖も青く、すき通っていた。サトパラ湖は、エンドモレーンが水を止めた氷河湖で、あまり大きくはないが、このあたりでは、美しい湖であろう。

ここへ登ってくると、スカルドとは異り実に涼しくなり、夕方では寒さを感じた。サトパラの町は、谷の出合や河岸段丘のあちこちの小さな土地を利用して、畑を作っているが寒村という感じであり、なぜサトパラのハイポーターが生れたのか、理由はすぐにわかる。6月ごろは、山に残った残雪がありきっと美しい風景であろうと思う。

夕方、レストハウスへ帰り、荷物12個を空港へ運んだ。サトパラでは、high-porter の Assad の家へ行き、夕食までごちそうになった。トマトスープはうまかった。ナマックティーも良かった。